
竜王様の黒妃

トキノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜王様の黒妃

【Nコード】

N5414T

【作者名】

トキノ

【あらすじ】

村に伝わるググの樹。おばあが教えてくれた呪文を唱えたら、そこは異世界でした。黒髪黒目は黒竜の証？竜王に嫁げ！！？？？ふざけんなー！真壁^{まかへ}幸^{さち}18歳、貞操の危機です！

プロローグ

おばあが死んだ。・・・たぶん。

4日前からおばあが居なくなつて、村も海も山も探したけど帰つてこなくて。

海におばあの使っていた漁の道具が残っていて。

昨日、海におばあの着ていた服が発見された。

警察はきつと海に誤つて落ちたんだらうと。

大時化おおしげの海では今から探しても助からないだらう・・・と。

そりやおばあも歳だからいつかは・・・とは思っていたけど、

こんな急になくならなくてもいいじゃないか。

胸の中がぽっかりと穴があいた。

うちは両親が早くに亡くなつたため、おばあが私たち姉妹を育ててくれた。

姉は準看護師の資格を取りながら高校を出てすぐに働いてくれた。

自分も高校を出たらすぐ何か仕事をすると言つと、姉もおばあも首を振つた。

大学の合格通知を見せたら涙を流して喜んでくれたのは、ほんの数日前。

帰る警察の人の背に、お礼をしている姉は少し涙目だった。

私は、ふと昔教えてもらった幼い頃を思い出していた。

「おばあ、あの話をして？」

老女はにっこりと微笑むと、孫を愛おしそつに撫でながら語りだす。

「昔むかーしのお話。」

黒い龍は聖樹ググを通ってこの地に舞い降りた。

龍の国から逃げてきた傷つき可哀想な黒龍を、村の若者は助け支えた。

若者の優しさに触れた黒龍は天女のように美しい娘に変化し、若者と結婚し子を成し、この地に留まった。

若者の死後もずっとずっと子孫を見守るため龍の国には帰らず、ググの木の下で眠っている。」

「それが神社のケヤキの木？」

「そう、あれがググとびの木」

「おねえ、私、ちよつとググの樹に行つて来る……。」

「何をいつてるの……。こんな時間に……。」

外はもう闇をまとわせていた。夜道は危険だけど今、行きたい。制止する姉を退け、神社へと走り出す。後を追うように姉が着いてくるが、振り返らなかった。村で一番大きなあの木。おばあが大好きだったあの樹を見たかった。

神社は誰も居らず、静かな闇だけがそこにあった。そしてその闇の中でさえ存在を隠せないかのように立派な樹はそこにいた。

そっと樹に触れ、腕を回して抱きしめる。

なんだっけ、おばあが内緒で教えてくれた呪文。

姉が中学に進学して、自分はまだ小学生で。ずっと一緒だった姉が遠い存在に見えて。寂しくて泣いていた私におばあが教えてくれた。どうしてもどうしても助けて欲しいときに使えって。

「・・・アロ・・・ググ・・・ドウ」

おばあ、寂しいよ。

おばあに会いたいよ。

「モロ アロ ググ！ドウ！！！」

強く、ググの樹に文句を言うように叫んだら。

ペア。

まばゆい光があたりを包んで。
抱きついていた樹がぐにやりと歪んで、飲み込まれる。

「さっちゃん!!!!!!!!!!」

姉が必死な顔で走ってきて、一瞬私の腕を掴んだ気がした。
視界が真っ白になり、意識が飛ぶ。

私はこうして、あの世界に飛ばされたのだった。

プロローグ（後書き）

はじめまして。

のんびり書いていきますので、更新遅いです、すみません。

「ぼかーんと、あたりを見ていたら、外国人のおじいさんが目の前にたっていた。

えーっと。あの、集団コスプレ??

それとも、どこか撮影所ですか??

首をかしげて、作り笑いをする。

「!」

「おじいさんはニコニコしながら話しかけてくれた。

うん、やっぱり言葉わからない!

何か伝えるように何度も何度も話しかけてくれるけど、

正直、発音さえ聞き取れない。全然わかんない!!

首を大きく振ると、おじいさんは困ったように後ろに居る誰かに話しかける。

フードをかぶったその人は、雰囲気的におじいさんよりは位が高そう。

フードの人は近づいてきて、目の前でしゃがむと、私のあごを持ち上げジッと見つめる。

顔はもう少しでキスができるくらい近づいてくる。

ど・・・ドキドキする・・・。

顔はかなりのイケメン。某ハリウッドスターも負けちゃうくらいイケメン!

瞳は深いアメジストのような紫。

「?」

脳内が痺れるような色気のある声。

「。」

何かを言われ、顔がどんどん近づいてきて、唇をべろつと舐めた。

「う・・・うぎゃああああ!!??」

舐めた!!!いきなりなめたああああああああ!!!

私は囲まれてる状況もわすれ、バチーンとフードの人を平手打ちをした。

「な・・・な・・・なにすんの!!チカン!!!!」

おもわず大声で叫ぶ。

イケメンだからって何やっても許されると思うな!!!って続けて叫ぼうとしたが、

ゴスンって何かに軽く殴られ、押さえつけられた。

「!!!!!!!!!!」

厳つい兵士が私を拘束している。

必死に抜け出そうとするも、小娘の力じゃびくともしない。

「放して!!」

なんでよ。なんでこんなことされなきゃいけないわけ?

悪いのはあっちの変態じゃない!!」

こっちの言葉なんて通じるかわからないけど、抗議だ!

日本語通じなくてもジェスチャーや雰囲気ですぐにかなるもんだって、

留学してた友人がいつてたし!!!

怒ってるオーラをガンガンに出してやる!

威嚇するような目つきで変態をにらんでいると、

聞き覚えのある単語が聞こえた。

「・・・おい。誰が変態だ・・・。」

あれ、言葉通じてるじゃん！

「。。」
変態イケメン（命名）が何かを伝えてくれたらしく、私の拘束は解かれ自由になる。

どうやら私の言葉が通じるのは変態イケメンだけのようだ。

「あの！ここどこですか！？」

私、神社にいたはずなんですけど！

てか、なんでこんなコスプレしてるんですか？

何かの撮影ですか？」

聞きたいことは盛り沢山！とりあえず言葉に出すと、変態イケメンは眉間に皺を寄せながら答えた。

「こすぶれ？？なんだそれは。

まあいい、とりあえずここは竜の国だ。

お前の名前はなんという？」

「真壁幸まかへさちだけど・・・。」

このイケメンなにいつてんだ？

竜の国???そんなどつかの物語じゃあるまいし。

そんな変な国名なんてあるわけない。

「マーヴェエ・サーチエ？」

「ちがいます！ま・か・べ・さ・ち！」

「マカヴェエ・サチエ？」

「さ・ち!!!」

「サチエ？」

「・・・もうそれでいいです。」

何度サチだと言ってもサチエとしか言えないらしい。

「流暢な日本語しゃべれるのに、なんで名前言えないんですか・・・」

思わず不満を呟くと意外な言葉が返ってくる。

「にほんご？さっきからわからない言葉がでてくるんだな。

この言葉は、竜族のみが解する竜語だぞ。

お前も竜族なのだからそれくらい知っているだろう？」

そう言われ周りの人間を見渡すと、

兵士さんたちも、おじいさんも一様に会話を理解できてないようだ。ただ、私がしゃべるたびに何故か期待のようなプレッシャーな目線を送ってくる。

普通の日本語しゃべってるだけなのに、なんでよー。

「ん？あの、竜族って・・・なに？

てか、私も竜族ってどういうこと??？」

「???何を言っているんだ？

黒髪に黒い瞳、その竜力。

どうみても黒竜だろう？お前は。」

この変態イケメンなにいつてんのー！ー！ー？

「いやいやいや、私は普通の人間ですよ？
竜力なんて怪しげなもの持ってませんよ！」

「サチエには解らないのか。」

普通に竜の血を引くものならお前の竜力は膨大だと感じる。
さすがは、・・・黒竜だな。」

さつきから黒竜って、いわれても。

生まれて18年、人間以外になつたことはない。
だいたいこの言葉だつてただの日本語だし。

「全然わかりません。というか。黒竜ってなんですか。」

日本人ならみんな黒髪に黒い目だし、言葉だつて・・・」

そのまま言い続けようとするの変態イケメンはおじいさんから何か
を受け取ると、

「そのニホンというのはどこなんだ？」と、変態イケメンは地図ら
しきものを広げる。

それを見て驚愕した。

なんということだ、そこに描かれているのは、私の見知った地図で
はなかった。

「今は森の中にある聖樹ググのここに居る。」

獣族と人間達の住む町はここ。竜族はここ。お前の住んでいた場所
はどこになる？」

「・・・あ。ありません・・・。私の知ってる地図じゃない・・・。」

「

地図には大きな大陸が3つ書かれていた。しかも縦に。竜族の住むという場所は、一番上の空に浮かんでいるかのように書かれている。

獣族、人間が住むという場所は真ん中。真ん中の大陸の左端に大きなググの樹が描かれている。こんな地球じゃありえない。

「やはりな。黒竜は異世界から渡ってくると言われている。それゆえ、この世界には黒竜はほぼ存在しない。存在したのは膨大な歴史の中も数回だ。」

一番近くて・・・確か400年前の漆黒の聖女くらいだな。」

400年前・・・。

そんな昔にしか黒目、黒髪が存在しないなんて・・・。

ここが地球じゃないなら。

私はどこに着ちゃったの？

てか！！異世界トリップって！！！！

どこの漫画の世界なのよおおおおおおおお！！！！

おばあ！

呪文となえたのに全然助けになってないよ！！！！

混乱する私を見て、変態イケメンはさらに爆弾を落とす。

「まあ、最初は戸惑うかも知れないが、慣れてくれ。これからお前は俺の妃となるんだからな。」

「え？いまなんて・・・？」

「お前は俺の妃・・・妻になる。光栄だろう？」
まるでこの世で一番素晴らしいことのように、変態イケメンは答える。

え、全然嬉しくないし！！

「王族の婚姻は、聖樹ググが選ぶと決められている。
呪師によると、俺の妃は今日現れるといわれた。
そして確認しに来ると、お前がいた。

つまり・・・」

「私があんたの嫁になる・・・ってこと？」

「そうだ。聖樹ググの選ぶ花嫁は王族に足りない何かを持ってくる。
・・・お前は、俺に何をくれるのだろうな・・・。」

ボソリと最後に呟いた言葉は、
先ほどもまでの自信たっぷりな態度ではなく、どこかすがるような目をする。

なんでそんな切なそうな顔してんの。

イケメンが愁いをおびたら、妖しい色気であるじゃないの！

やめてよ！ただでさえイケメンに免疫ないのに。

しばらく様子を見ていたおじいさんが、そわそわしながら変態イケメンに近づいて、

何かを話している。なんだか急いでいるようだ。

「。、」

おじいさんの言葉にうなずくと、変態イケメンは近づいてくる。

「おい、話の続きは後だ。城へ戻る。」
ぐいっと腕をつかまれ、無理やり立ち上げられ、
変態イケメンが乗ってきたと思われる馬車（？）っぽいものに乗る
ように言われる。

車を引くのは馬じゃないけど。

見たこともない恐竜みたいな大きさの爬虫類ですけど！

翼とかあって、もうそれはそれはファンタジーなんですけど!!!

改めて異世界に着たんだと実感させられたわ。

というか。無理やり馬車に乗せようとさっきから兵士がグイグイ押
されてるんですが。

せめて3分くらい混乱する時間をちょうだいよ!!!

しかもイキナリ変態イケメンと個室に二人きりですか。

妃だっていつてたから普通か！

けど私は納得してませんよ!!!

「ちょっと、まってよ!!!まだ私は行くと決めたわけじゃ・・・」

抗議しようとする、変態イケメンはにっこり笑いながら、

「そろそろ闇の時刻だ。

腹をすかせた魔獣に食べられたいのなら、ここにいてもいいぞ？」

と優しく囁くように言った。

全然、会話内容やさしくないし!!!!!!

ニッコニコ笑いながら馬車のドアの奥に進む変態イケメン。
乗るか乗らないかは、私が決めろって？

・・・魔獣ってなんだ、熊か？

そういえば数年前に村の猟師が熊に噛まれてたな。

それ以来鈴とか持ってたたりしたし。

そういえば、あの猟師どうなったんだっけ？

えーと、うん。熊は、怖いな。

こんなわけの解らない世界の熊は、もっと怖いだろうな。

「いえ。あの……。オネガイシマス……。」

大人しく乗ることにしました。

まるでドナドナ。

だって、死にたくないんだもん！！

3 (後書き)

やっと森から動きました！

しばらく世界の説明がちよこちよこ入るので、

話がゆっくりしか進まず説明ばかりですね。

読みにくかったらすみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5414t/>

竜王様の黒妃

2011年9月18日14時43分発行